

160 Jahre

Deutschland - Japan

Keio und Deutschland

慶應義塾とドイツ — 日独国交開始160周年

2021年は「日・プロイセン修好通商条約」によって日本とドイツの国交が始まって160年。明治期の日本は法制、科学、芸術などさまざまな分野でドイツを模範として国づくりを進めてきました。そうした日独関係の歴史を踏まえつつ、現在の慶應義塾における多様な分野での「ドイツ」とのつながりを紹介します。



総合政策学部 教授
わらがいくみ
藁谷郁美



法学部 教授
フリッパ・オステン



理工学部 教授
おびしんのすけ
小尾晋之介

01 Symposium Symposium 座談会

座談会「日本とドイツ」

慶應義塾においてドイツと関わりが深い3名の教員に語ってもらいました。

ドイツとの出会い、日本との出会い

小尾 私とドイツの関係は音楽に始まります。わが家にはいつもバッハ、ベートーベン、ブラームスなどの音楽が流れていました。ドイツへの関心が自然と育まれ、慶應義塾高校3年からドイツ語を学び始めました。理工学部ではドイツへの留学経験がある前田昌信先生に師事し、先生がドイツとの学生交換プログラムを計画されたときに、修士課程だった私はすぐに手を挙げました。それから合計5年半ほどバイエルン州のエアランゲン大学で研究活動に従事し、学位を取得しました。

藁谷 今は文学や言語教育などが専門ですが、私もドイツとの関わりはドイツ音楽への熱い思いです。子どもの頃からラジオ放送でカラヤンの演奏を聴いていました。中学からは吹奏楽部でクラリネットを吹き、ドイツ・リート

(歌曲)に夢中になって歌ったりもしていました。そこでドイツ語を読む面白さを感じたことが、後にドイツ文学を専攻し、ボン大学に留学することにつながっていきます。

オステン 私は外交官だった父の転勤で中学・高校、そして慶應義塾大学や大学院などと、自我形成期のほとんどを日本で過ごしました。私にとって日本は心のふるさとといっても過言ではありません。

藁谷 オステン先生のご専門の法学分野はわが国ではドイツの影響が大きいですね。

オステン 法学研究において日独の対話は今も重要です。私は、学生時代から第二次世界大戦の日独の指導者の戦争責任を法的に問う東京裁判やニュルンベルク裁判に関心があり、それをきっかけに国際刑事法について研究をするようになりました。実はこの分野の研究と教育は世界でも数少なく、慶應義塾大学で取り組むことに大きな意義を感じています。

異なる大学の制度

小尾 私は留学でドイツと日本の「大

学」ではまるで異なっていることに驚かされました。日本の大学制度はもとも明治期にプロイセンのベルリン大学(現在のフンボルト大学)をモデルに講座制という仕組みを導入したのですが、今やその内実はかなり異なっています。ドイツでは、トップの教授が多くの部下、ポスドク・大学院生を束ねています。日本と違って博士課程の院生は、大学から給与をもらって研究活動に従事し、終業時間が来たらすぐに帰宅します。夜遅くや週末に研究所にいたるのは、いつも私たち留学生だけでした。

藁谷 私が学んだ人文科学分野の大学院では、一人一人が自分の研究に取り組むスタイルでした。日本との大きな違いといえば、研究者志望ではなくても博士課程に進む人が多いということです。ドイツでは修士と博士では修了後のキャリア形成に大きな差があるからです。

小尾 日本では大学で学んだ専門性と社会での職業が直接結びつかないケースが多いこともあり、博士課程まで進学しようというインセンティブがないう。学位が仕事や収入に直結しないの

は大学だけの問題ではありませんが。
藁谷 でも、グローバル化する社会の中で、将来的には専門の学位を取得してキャリアアップしていくことがスタンダードになっていくでしょう。私は学生に10年、20年後を見据えて学位を得て社会に出ることを勧めています。

「英語+α」のススメ

オステン もう一つ私は「英語+α」の語学に大学以前、学校教育のできるだけ早い段階から触れさせることも、今後は必要だと感じています。小尾先生のように高校生からドイツ語に触れる体験をすれば、自ずとより広い世界への視野が育まれますからね。

小尾 日本の学生は英語を習得すれば十分だと思いがちですが、オステン先生のおっしゃる通り、これからの時代、「英語+α」は必要不可欠になるでしょう。実際、ヨーロッパの知識人は普通に5、6カ国語を操っています。

藁谷 言語は、その言葉を使う人々のモノの考え方や社会の見方を垣間見る「窓」。複数の言語を学ぶと、それだけこの世界の様相を異なる窓に視座から捉えることができるようになります。

英語は広く通用する言語ですが、一つの窓に過ぎません。たとえ初級の段階でも、日本語や英語で見えなかった世界の光景が見えてくるのです。

オステン 私も思春期を日本で過ごしたおかげで、新たな言語環境は子どもときは大変でしたが、視野も感性も大きく広がり、複眼的な思考ができるようになったことに今では感謝しています。

小尾 理工学部では、2007年よりドイツ・アーヘン工科大学のご協力でサマースクールなどを実施して、これまでに200名以上が参加しています。このように若者たちにとってのドイツへの入り口を作ることも自分の役割と考えています。

藁谷 私は2000年春学期からオンラインでドイツの大学との共同授業に取り組んできました。授業では日本語とドイツ語を両方使用し、バーチャルな交流の後に現地へ出向いて一緒にフィールドワークを行うのです。学生たちはドイツの友人とその後もつながりを持つています。

小尾 海外渡航が困難な状況下、オンラインで国境をまたいで学生間の交流が活発化していることはポスト・コロ

ナの明るい兆しの一つかもしれません。

藁谷 ドイツでは古くから続く街並みや文芸の継承を大切にしますが、決して守旧的ではなく、時代に応じた自分たちの在り方を常に追究しています。オペラでも古典的な様式にこだわらず、新しいスタイルを取り入れていきますよね。

小尾 EU諸国の中ではドイツは日本人にとって住みやすいと思いますし、日本人とドイツ人の相性はいいとも言われていますね。

オステン そういえば初めてドイツ(当時はプロイセン)を訪れた日本人の一人が福澤諭吉先生でした。

藁谷 福澤先生が通訳として参加した文久遣欧使節ですね。

オステン ベルリンで福澤先生は大学のほか刑務所も訪れ、そこで受刑者にも教育を授けることに感銘を受けて「世界中一番の文国というべし」と書き残しています。その後、福澤先生が慶應義塾を發展させ、日本の近代警察制度の制定などにも一役買ったことに思いをはせると、刑事法分野を超え、ドイツと日本の二つのふるさとを持つ私は深い感銘を覚えるのです。

福澤諭吉の ベルリン来訪と 慶應医学

1862年、福澤諭吉は遣欧使節の一人としてベルリンを訪れています。『福翁自伝』には手術見学中に恐ろしく逃げ出したという福澤の意外に臆病なエピソードがありますが、これはベルリンのシャリテ病院での出来事でした。ここで福澤は緒方洪庵が深く影響を受けた医学者フーフェラントについて医師と話しました。緒方はフーフェラントの内科学書 *Enchiridion Medicum* (医学必携) を『扶氏経験遺訓』として翻訳、刊行しています。その一部をまとめた『扶氏医戒之略』には「医の世に生活するは人の為のみ、己がために非ずということをその業の本旨とす」など、医師としての心構えが記されています。この心構えは慶應義塾大学病院の理念に通ずるところがあり、遠く時代と海を越えて受け継がれていると言えるかもしれません。医学部の始祖、北里柴三郎もベルリンに留学し、コッホの下で優れた研究を重ねました。

科学技術の国ドイツのSF



文学部独文学専攻
教授
識名章喜
しぎなあきよし

私たちがなんとなくドイツ語圏に抱いている印象に科学技術大国だった、というイメージがある。自動車や工作・医療機器、兵器、化学製品など産業を支える核心技术の開発や科学史上画期的な理論の発見が19世紀末から20世紀前半にかけてのドイツ人研究者によって担われてきた歴史がある。だからこそ科学技術の未来を描くSFの分野でも、さぞ名作がたくさん生まれているだろう、と想像する人がいるかもしれない。だがこの予想は見事に裏切られる。ドイツSFの父クルト・ラスヴィッツや独特の詩的宇宙観を持っていたパウエル・シェーアバルト、ドイツ人技術者の活躍を描いたハンス・ドミニクの名前をご存じだろうか。

ドイツ文学の弱点と指摘されるのが、娯楽性へのためらいである。SF

的想像力は科学技術のアイデアと戯れることで生まれる驚異の演出に真価を発揮するのだが、ドイツ人は（とあまり一般化するのはいくつか）破天荒なアイデアの面白さを追求するのではなく、哲学してしまう傾向が強い。そこがドイツ文学の長所である思弁的な深みをもたらしてはいるものの、科学与冒険とを結びつけたフランスのジュール・ヴェルヌやSFの名家である英米圏の作家と比べると地域限定の知名度に甘んじる原因になっている。

さらに科学技術立国のドイツとは矛盾するように見えてしまうのが、ドイツの文化人の間に根強い、自然を制御する科学技術に対して抱く嫌悪に近い警戒心と科学技術を悪魔化しがちな文藝的伝統である。最近のドイツが環境保護にどこの国よりも熱心で、「緑の党」が伸長する背景もそこにある。技術で管理された監視社会のディストピアを描くドイツの作家は多いが、SF本来の大胆な未来予測に基づいた発想

の自在さは苦手とするところだ。

そういう不利な出版事情のなかで戦後ドイツ語圏SFの代名詞となっているのが、半世紀以上続くシリーズ読みの『ペリー・ローダン』（ハヤカワ文庫で刊行中）である。登場人物にドイツ人らしい名前が出てこない無国籍性の強い宇宙英雄譚だが、ドイツ語で書かれればこそその妙味は、未来の武器や装置を、単語を重ねた新奇な造語で名付ける表現にある。これは合成名詞をいくらかでも作れるドイツ語の特性を生かしたアイデアで、文脈で判断するしかない謎めいた発明に想像をたくましくする楽しみもSFの醍醐味の一つである。

21世紀に入るあたりから、ドイツでもエンターテインメントに目覚めた新しい世代の台頭がめざましい。お勧めはA・エシュバツハの『イエスのビデオ』とF・シェッツィングの海洋SF『深海のYrrer』（ともにハヤカワ文庫）、ぜひ一読を。



ドイツで人気のSFシリーズ『ペリー・ローダン』シリーズの一冊



文学部美学美術史学専攻
教授
後藤 文子

ごとう ぶんこ

私の専門は近代の庭園芸術です。19

世紀以降、建築、彫刻、絵画、工芸などさまざまな造形芸術領域で活躍した芸術家のなかには、熱心に庭づくりに取り組んだ人々が少なくありません。フランス印象主義の画家クロード・モネが丹精込めたジヴェルニーの庭など有名ですが、ほかならぬ同時代のドイツでも、デンマークとの国境に程近いゼービュルの画家エミール・ノルデ、ベルリンの画家マックス・リーバーマンや前衛的美術家ハンナ・ヘーヒなど枚挙に暇がありません。

彼らの庭づくりの背景には、19世紀半ばの英国に端を発し、従来の歴史主義的な大規模庭園を否定して自然らしさを追求した規模の小さな邸宅庭園が、フランスやドイツへも伝播したという文化的な事情があります。そのよ



写真1 ムルナウの庭で鋤を手にするカンデンスキー、1910~11年頃

出典 H. Kohle (Hg.), *Geschichte der bildenden Kunst in Deutschland*, Bd. 7, München u. a. 2008, S. 420.

うな庭園を可能にしたのが園芸技術の目覚ましい発展でした。品種開発や改良が進み、目新しい形態や色彩を特徴とする多様な植物が市場に出回ると、一年を通してそれらの千差万別な生育の様を庭で楽しむことが可能になったのです。こうした園芸史的観点から見ると、彼ら近代芸術家の庭づくりは時代の園芸潮流に呼応した単なるガーデニング趣味と受け取られるかもしれませんが。しかし例えば、自ら鋤を手にして庭を耕す画家ヴァシリー・カンディンスキー(1866~1944)の姿は、実は私たちにもっと別の、近代芸術の本質に関わる問題を問いかけてきます(写真1)。写真が撮影された当時の画家は、まさに人間の内面や精神性を表出する新たな抽象絵画を模索していました。心の内的な動きや精神の作用など、生に関わる問題は画家にとっての

本質であり、その

ような芸術家が自ら土に触れ、生命的な存在である植物に寄り添っていることは、新しい芸術の探求それ自体と無関係ではあり得ません。

あるいはベルリン北西部に今も残るハンナ・ヘーヒ(1889~1978)の庭です(写真2)。第一次世界大戦期にベルリン・ダダ運動唯一の女性作家として前衛的な創作活動を旺盛に展開した彼女は、第二次世界大戦開戦の直後にこの家に移住すると、間もなく生涯をかけて庭づくりに精魂を傾け始めます。人の背丈より高く伸びた多年生植物や果樹が混沌と生い茂る庭は、ナチスやソ連軍の追っ手から身を隠す場でもありました。しかし晩年の作品において、もはや芸術家の自己と庭が渾然一体と化したかの表現を認めるとき、庭づくりが、芸術家の身体を介した芸術創造と生きることが接合する地点であったと考えずにはいられないのです。



写真2 植物が生い茂るハンナ・ヘーヒの庭(撮影:筆者、2015年)



経済学部 教授
飯田 恭たかし

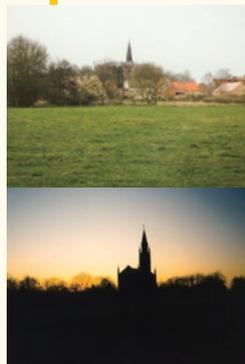
1861年に日本はプロイセンと修好通商条約を結びましたが、その10年後の1871年末、明治新政府の首脳を含む岩倉使節団は横浜港から米欧回覧の旅に出ます。その目的の一つは欧米先進国の制度・文物の摂取でした。まさに国を挙げて西洋から学ぼうとしたのです。1873年3月、使節団はついにプロイセンに到達します。一行はブランデンブルクの「広平ノ大野」を汽車の窓から眺めながらベルリンの駅に入ったと記録されています。一行の目的は、麦畑と牧草地の広がる大平原と、その至る所に浮き立つ村の教会の尖塔が映じたことでしょう。

それから120年後の1993年、僕はベルリンに留学し、このブランデンブルク農村の歴史を研究することになります。そこには相変わらず「広平

ノ大野」が横たわっていましたが、国際情勢は一変していました。欧米から学ぶということはもはや日本でも自明ではなく、それへの反発も強まってきました。そのため、欧米人の研究の翻訳や日本語での紹介が中心だった日本人の西洋史研究にも、オリジナルな成果が求められるようになっていました。こうした状況の中で、僕は留学以来、周りのドイツ人と同じように研究すること、つまり直接史料を読んでオリジナルな発見をし、それを独文や英文で国際的に発表することをモットーとしてきました。史料館で近世の封建所領に関する古文書を読み重ねつつ、その所領内にあつた村々を実際に訪ね、現地の教会に伝存する教区簿冊(村人の出生・結婚・死亡の記録)を牧師さん宅に泊まり込んで撮影させてもらったりもしました。

2010年にはベルリンでその成果の一部を本として出版しましたが、その書評・紹介の中には、日本人がドイ

ツ農村の細部にまで立ち入った、とあって特記するものもありました。ドイツ人と同じようにとの思いでやってきた僕はこの反応に一瞬戸惑いましたが、よく考えればそれも無理からぬことです。実際日本とドイツは遠いのですから。しかしこの距離こそが実はカギなのかもしれません。歴史学では、史料のどこに注目するかはその人次第です。僕がドイツの史料を読んで感じた驚きの少なくともいくつかは、僕が遠い日本を生活の場としてきたがゆえのものなのでしょう。この外からの眼差しがオリジナルな発見に結実し、ドイツ農村史研究の国際的な発展に少しでも寄与できているとしたら、それは喜ばしいことです。他方、ドイツの史料に接して感じた驚きを、日本語の読者や塾生に還元していくことも僕の重要な役割です。これはかつて岩倉使節団が国を挙げて取り組んだ欧米の制度・文物の摂取という仕事を、こぢんまりと継承するものと言えるかもしれません。



留学中に訪ねたブランデンブルクの村々